京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **29** (2010), 27–42

カムチベット語維西塔城 [mThachu] 方言におけるそり舌化母音
—その音声学的特徴の記述と分析—

鈴木博之

1 はじめに

1.1 維西県塔城鎮のチベット語

中国雲南省迪慶藏族自治州維西傈僳族自治県南部を中心に話されるカムチベット語 Sems-kyi-nyila（香格里拉）方言群 Melung（維西塔城）下位方言群に属する各種方言[1]は、チベット語諸方言の中でも非常に際立つ「そり舌化母音」や「咽頭化母音」をもつということが近年の研究によって判明してきた。鈴木、ツェリ・ツォモ (2007) はそり舌化母音をもつ Melung（保和・永春）方言を扱い[2]、Suzuki (2009c) は咽頭化母音およびそり舌化母音をもつ Zhollam（攀天閣嘎嘎塘/勺洛）方言を扱っている。しかしながら、Melung 下位方言群の中で最も多くの話者を有する mThachu（塔城）方言[3]については、1950 年代の中国の少数民族言語一斉調査（普査）のときに調査され[4]、また先行研究で部分的に資料が用いられることがあった（鈴木 (2009)、張濟川 (2009:311-312) など）ものの、全体像はこれまでに紹介されていない。

《維西傈僳族自治県概況》(2008:35-40) に記載されている 2004 年時点での人口資料に基づくと、Melung 下位方言群が用いられる郷鎮に居住するチベット族の人口は以下のようである。

1. 保和鎮：553 人
2. 永春郷：186 人
3. 塔城鎮：7257 人
4. 攀天閣郷：1284 人

[1]方言区分については Suzuki (2009a:17) を参照。

[2]同論文では、そり舌化母音を「r 化母音」と呼んでいるが、「r 化」という表現が多義である（cf. 黒澤 2001）ことから、その使用を避けて調音方法を的確に表す用語で言い換える。

[3]mThachu 方言の話される塔城鎮では、下位方言区分の異なるチベット語方言も話されている。本稿では、其宗村及び巴珠村で話される方言以外を mThachu 方言と呼ぶ。

[4]このときの資料では、地点名が「臘普/拉普」となっている。その名称は瞿霽堂 (1991) や Zhang (1996) に見える。当該地名の歴史については呉光范 (2009:244-245) 参照。

以上のうち、保和鎮・永春郷の場合は他の郷鎮から移住してきた人が大半を占め、Melung 下位方言群に属さない Budy（巴迪）方言を用いる地域の出身者もいる。そして、この地域ではもはや日常的にチベット語を用いる機会がほとんどないという（鈴木、ツェリ・ツォモ 2007:94）。塔城鎮の場合、主に其宗村及び巴珠村で話されるチベット語は Melung 下位方言群に属さないため、これらの話者の数も除外しなければ Melung 下位方言群の方言の話者数を示すことにならないが、詳細な資料がないため不明である。さらに、どの地域においても若年層ではチベット語を話さない人もいるため、以上に示した数よりも話者数は少なくなるけれども、塔城鎮の居住人口が Melung 下位方言群を用いる人の中で大半を占めていることは明らかであろう。

1.2 そり舌化母音を取り上げる背景

鈴木、ツェリ・ツォモ (2007) が記述した Melung 方言は、チベット語諸方言の中で本来語の音素としてそり舌化母音が認められるという、きわめてまれな類型特徴をもつ方言である[5]。しかしながら、Melung 方言はもはやほとんど話者がおらず、収集された語彙の総数も少ない。一方、この方言と同一の下位方言群に所属する Zhollam 方言では、そり舌化母音はあまり記述されず、その代わり多くの例に咽頭化母音が認められる（Suzuki 2009c）。その中で、mThachu 方言はこの下位方言群の中で最も多い話者数を擁し、かつそり舌化母音が Melung 方言よりも多くの語彙に見られることが分かったため、その記述を通してそり舌化母音の特徴を明らかにすることは、この下位方言群全体をより詳細に特徴づけることにつながるといえるだろう。

また、別の側面として、そり舌化母音それ自体の音声特徴を精密に記述する目的もある。鈴木、ツェリ・ツォモ (2007) はそり舌化母音のことを「r 化母音」と呼んだが、この「r 化」が調音音声学的に多義であることが報告されている[6]。それゆえ、「r 化」は音声実態を表す用語ではなく、当該現象を調音音声学的に的確な用語を用いて表す必要性が生じている。そしてこれは、mThachu 方言の近隣に話されるナシ語にも通じる問題になる[7]ため、細心の注意を払った記述が要請される。

本稿では、以上に述べた指摘を踏まえつつ、mThachu 方言のそり舌化母音をもつ語の記述を行い、その音声学的な特徴を指摘し、簡単にその来源について整理する。

[5]迪慶州のチベット語の方言分類を議論した鈴木 (2008) と Melung 下位方言群の方言所属を議論した Suzuki & Tshering mTshomo (2009) によると、そり舌化母音の存在によって Melung 下位方言群が特徴づけられることから、そり舌化母音に関する議論は方言分類にも影響を与えることになる。

[6]詳細は Ladefoged (2006:224-226)、黒澤 (2001, 2009) を参照。

[7]詳細は黒澤 (2001) を参照。

1.3 本稿で用いる言語資料

本稿で用いる mThachu 方言の言語資料は、筆者の現地調査で得られたものである。主な調査協力者はランゾン [Lha-'dzoms] さん（女性）で、維西県塔城鎮柯那村出身である。チベット語とナシ語の二言語併用[8]を日常とし、雲南漢語も理解する。調査は 2010 年 2 月維西県塔城鎮で行った[9]。主に議論の対象とするのは語の引用形式で、文中に現れる形式は必要な場合を除き触れない。また、本稿で対照するその他の言語および方言は、出典を明記しない限り全て筆者の現地調査によって得たものを用いる。

2 mThachu 方言の母音組織概観

mThachu 方言の母音組織について、舌位置を基本とする一覧は以下のようになる[10]。

i　　ɨ　　ɯ u
e　　ɵ ə　　o
ɛ　　ɔ
a　　ɐ　　ɑ

以上の舌位置に対し、それぞれ長/短、鼻母音/非鼻母音、そり舌化/そり舌軟口蓋化/非そり舌化も対立する。しかし、必ずしも全ての母音がこれらの対立をもつわけではない。そり舌化に注目した母音の分布は以下のようになる。

二次的調音なし	i	e	ɛ	a	ə	ɐ	ɑ	ɔ	o	u	ɯ	ɨ	ɵ
そり舌化		eʿ	ɛʿ		ɚʿ			ɔʿ	oʿ	uʿ	ɯʿ	ɨʿ	
そり舌軟口蓋化					ɚʿˠ				oʿˠ				

このほか、a には咽頭化の音色[11]がかぶさる例（[aˤ]）があるが、基本的に末尾に声門閉鎖を伴うときに限られる（[aˤʔ][12]）ため、咽頭化母音を母音組織には含めない。

[8]塔城鎮の言語使用状況はきわめて複雑で、チベット語とナシ語の双方とも社会的上位言語になりうる。家庭の中でも状況によっては両者が用いられる。加えてマリマサ語とリス語を身につけている人も珍しくない。主な調査協力者はチベット族であるが、このような多言語環境の中でチベット語もナシ語も母語並みに身につけている。

[9]塔城鎮での調査は筆者の友人である和成軍さんの紹介で実現し、調査中も必要に応じて筆者の漢語による質問をナシ語で調査協力者に伝えるなどの協力を得た。また調査の一部には、主な協力者の親戚のチベット語話者も同席し、発音および語彙についての情報を得ることができた。

[10]子音および声調についての一覧は、本稿末尾の付録に示す。

[11]この音声は舌根を咽頭壁に接近させることによって実現される。

[12]これは/aʔ/に含まれる変異音である。

3　そり舌化母音の音声実現

3.1　mThachu 方言におけるそり舌化母音の音声記述

ここでは、mThachu 方言におけるそり舌化母音を含む例を記述し、その音声実現の詳細についても整理する。

mThachu 方言におけるそり舌化母音の全般的な調音音声学的特徴は、母音の調音時に舌尖を後部歯茎～前部硬口蓋に向かって持ち上げる動作によって実現されるものといえる。そのため、そり舌化は母音の二次的調音として位置づけることができるだろう。この調音動作で現れるものを [˞] と記述する。たとえば、以下のようである。

ˉpɔ˞「雲」	ˆbe˞ nɑʔ「ハエ」
ˊfiɔ˞「山」	ˊkɔ˞「ナイフ」

以上のような例におけるそり舌化は、基本的に母音の調音が始まった後に舌尖が持ち上がる特徴をもち、母音の調音の間に舌の位置・形状に変化が起き、かつ母音調音時に継続的なそり舌性を帯びるものである。mThachu 方言では、先に示したように、全ての母音がそり舌化で現れるのではない。また、そり舌化母音は舌位置において対応する非そり舌化母音と必ずしも舌位置が近似するわけではなく、いくつかは母音の調音開始時においても比較的差が大きくなる。主要な音声実現は以下のようになる。

二次的調音なし		そり舌化	
/e/	[e]	/e˞/	[e˞]
/ɛ/	[ɛ]	/ɛ˞/	[ɛ̞˞]
/ə/	[ə̹, ɿ, ʅ]	/ɔ˞/	[ɔ˞]
/ɔ/	[ɔ]	/ɔ˞/	[ɔ̞˞]
/o/	[o]	/o˞/	[o˞]
/u/	[ʊ̞]	/u˞/	[ʊ˞]
/ɯ/	[ɯ]	/ɯ˞/	[ɯ˞]
/ʉ/	[ʉ]	/ʉ˞/	[ʉ̞˞]

特に二次的調音を含まない/ə/は音質の大きく異なる異音を複数持つが、基本的には初頭子音による条件変異で、[ɿ] は歯茎音に後続するときに、[ʅ] はそり舌音に後続するときに現れうる。その一方でそり舌化の/ɔ˞/は初頭子音が何であれ、舌位置の一定した音声実現になるという点に注目できる。

また、母音の調音の後半に注目すると、母音の調音が終わった後、つまり出わたりに舌尖が持ち上がった状態で発音が維持されることはなく、[˞ɹ] や [˞ɻ] といったよ

うに末尾に接近性の極めて高いすなわち子音的な要素が残存することはない。それゆえに、そり舌化母音を/Vɹ, Vɻ/などと表記するのを避け、/V˞/と表記する。

両唇音を初頭子音に持つ例の中には、そり舌が母音の調音を開始する時点ですでにそり舌の状態を形成しているものがあり、そのような場合はわたり音としてそり舌接近音 [ɹ] が挿入されているような聴覚印象を受ける。たとえば、以下のようである。

ˆʱdʑɛ ᵐbʉ˞ː 「栗」　　ˊtʂʰɛ˞ bɔ˞ŋ「氷」

[ᵐbʉ˞ː, ᵐbʲʉ˞ː]　　[bɔ˞ŋ, bʲɔ˞ŋ]

しかしこのような音声実現も、重要なのは母音の調音全体もしくはその後半にかけて形成されるそり舌の調音動作であるため、わたり音に/ɹ/を認めることはしない。初頭子音が両唇音の場合に以上の音声現象が現れるのは、おそらく両唇の調音に舌が関わらないためであろう。

同様に、初頭子音が/ɦ/の場合も、いくつかの語においてさらにそり舌化と異なる二次的な調音が加わることもある。たとえば、以下のようである。

ˆɦʷɔ˞ː tʰuʔ「骨」　　ˋtsʰe ɦʸu˞ŋ「長寿」

以上のように、/ɦ/の場合は初頭子音の調音時[13]から母音の調音にかけて二次的調音がかぶさる場合があり、音声学的には [ɦ] そのものの二次的調音として実現されているものとみなせる。このときの二次的調音には、以上に示した両唇軟口蓋化の [ɦʷ] と軟口蓋化の [ɦʸ] の 2 種がある。これらはいずれも単なる [ɦ] とは交替できないため、それぞれ/ɦʷ/、/ɦʸ/と記述される。一方で/ɦʷ/は [w] と発音されず、/ɦʸ/も [ɣ] と発音されない[14]。前者の場合は/ɦ/-/ɦʷ/-/w/の間に対立を認めることができる。

ˊɦɔ˞「山」
ˆɦʷɔ˞ː tʰuʔ「骨」
ˊwɔ˞ pə「めじろ」

さらに、現時点での語彙資料の中では/ɦʷ/はそり舌化母音とのみ共起している。その一方で、/ɦʸ/は以下のようにそり舌化母音を伴わずに現れる例がある。

[13]厳密には子音調音開始から少し遅れて二次的調音が行われる。

[14]mThachu 方言では/w/も/ɣ/も音素として設定される（末尾の子音表を参照）。それらの実現形と [ɦʷ, ɦʸ] という発音は混同されないから、後者はそれぞれ/ɦʷ/、/ɦʸ/と記述される必要がある。

ˆɦʸɛː「山羊」　　ˊʔɛ ɦʸɑʔ「酒」

なお、「酒」の第２音節は$^{\neg ɦ}$ɣɑʔ「整理する」とよく似ているが、両者の初頭子音は混同されることはなく、弁別的である。

さらに加えて、いくつかの語ではそり舌化母音の調音にさらに軟口蓋化がかぶさるものがある。すなわち軟口蓋化という二次的調音が、そり舌化と同時かもしくはやや遅れて母音の調音が開始されて以降に現れてくるものである。この場合、舌の形状は舌面中央がへこんだ状態になり、舌尖と舌背後部でいわば同時調音的にせばめを作っているといえる。この音は、現時点での語彙資料の中では初頭子音/ɦ/とのみ共起している。たとえば、以下のようである。

ˊɦɔ˞ˠ pu「友人」　　ˊɦə˞ˠ je「尾根」

このそり舌軟口蓋化母音は、発話速度が速い場合軟口蓋化の要素が弱くなることがあり、聴覚印象としてはそり舌化母音と大きな違いが見られなくなるが、発話速度がゆっくりの場合は明瞭に軟口蓋化も起こっているのが認められる。

これに対し、そり舌化が弱くなり軟口蓋化が主たる二次的調音となるといった、逆のパターンの発音は決して起こらないことに注意しなければならない。あくまでもそり舌化が主たる発音となる。この言及が重要な意味を持つのは、ナシ語の音声との対比においてである。ナシ語には先行研究で/ər/などと表記される母音があり[15]、塔城鎮で話される方言の１つである啓別方言の筆者の表記では/əˠ/となるけれども、これとカムチベット語 mThachu 方言の/ə˞ˠ/とは音声学的に峻別されなければならない。特に母音の開口度に大きな差異が出て、ナシ語啓別方言の/əˠ/は [ə̞ˠ / ɜˠ] で実現される傾向がある一方、カムチベット語 mThachu 方言の/ə˞ˠ/は [ə˞ˠ] というように、舌位置は中舌半狭を保つ傾向にあり、両者は話者によって音声学的に完全に区別されるようである[16]。

3.2　他の Melung 下位方言群の方言におけるそり舌化母音との対比

ここでは、以上に述べた mThachu 方言のそり舌化母音と、先行研究で明らかにされている Melung 方言および Zhollam 方言のそり舌化母音の音声学的特徴を対比

[15]これについては黒澤 (2001, 2009:71) を参照。ナシ語の記述においては、表記が表す音声実現とそれに対する表記方法との間に非常に複雑な問題がある。本稿はナシ語の問題を扱うわけではないため、詳細は割愛する。

[16]筆者の調査協力者がカムチベット語 mThachu 方言とナシ語啓別方言の２言語を母語並みに操るため、このような判断が可能となった。なお、この音声学的差異は、筆者が直接「チベット語とナシ語の発音の違いが認められるか」と尋ねたことによっているのではなく、筆者の実際の発音を聞いた協力者から両者の音声学的な違いについて自然な発話として聞きだせた点、注記しておく。このため、この言及には十分な信頼性があるといえる。

する。

1. Melung 方言（鈴木、ツェリ・ツォモ 2007）
   そり舌化母音は/ɚ, ɛ˞, ɔ˞/のみが認められる。しかし/ɚ/が大部分の例を占め、明らかにそり舌化母音の出現には母音の音質による制限がかかる。そり舌化の主たる調音は mThachu 方言と共通で、母音調音時における継続的なそり舌性を帯びたものである。ただし 1 音節語では母音の入りわたり、出わたりともに接近性のきわめて高い子音的要素を伴わないが、後続音節の存在する語の一部でそり舌化母音を含む音節の末尾に/r/が認められ、この点で mThachu 方言と異なる。

2. Zhollam 方言（Suzuki 2009）
   そり舌化母音は/ɚ/のみで、しかも具体例がきわめて少ない。そり舌化の主たる調音は mThachu 方言と共通で、母音調音時における継続的なそり舌性を帯びたものである。mThachu 方言と同様、そり舌化母音の前後にはわたり音的なそり舌の要素を伴わない。

4 そり舌化母音とチベット語文語形式の対比

そり舌化母音はその存在がチベット語方言研究上きわめて珍しい要素であるため、それを持つ Melung 下位方言群を扱う先行研究では、その来源に関する議論が優先的に行われてきた[17]。mThachu 方言についても、そり舌化母音の共時的記述の次には、その来源に興味がもたれる。

以下では、Melung 下位方言群を扱う先行研究で明らかにされているそり舌化母音の来源を踏まえ、そり舌化母音をもつ語をチベット文語形式（以下「蔵文」）と対照して、その特徴について考察する。その際、次のように蔵文形式に基づいて分類して示す。

1. 蔵文基字 r をもつ形式に対応するそり舌化母音
2. 蔵文足字 r をもつ形式に対応するそり舌化母音
3. 蔵文対応形式に基字/足字 r を含まない、もしくは蔵文に対応する形式をもたないもの

[17]特に鈴木 (2009) や Suzuki (2009c) が通時的分析を中心に議論している。

ここでは、以上の区分に基づいて整理することを主たる目的とする。以上の 1., 2. の対応関係を得られればmThachu 方言の事例も Melung 下位方言群の他の方言と同様に整理できる[18]ということを意味している一方、3. の場合は mThachu 方言に特有の現象であるということが理解できる。なお、そり舌化母音への発展過程に関する問題は扱わない[19]。

なお、以下に示す例の中には、口語形式と蔵文との間に完全には対応関係を得られない場合も少なくないが、蔵文に初頭子音（群）に r を含む音節の対応関係を中心に整理した点、断っておく。

4.1 蔵文基字 r 対応形式

この場合は基本的に初頭子音が/ɦ, ɦʸ, ɦʷ/になる。

1. そり舌化母音を含むもの

蔵文	mThachu 方言	語義
ri	ˊɦɚ	山
ri ?	ˊɦɚˠ je	尾根
rus pa	ˆɦʷɚː tʰuʔ	骨
sgang rus	ˉɦgõ ɦʷɚː	背骨
tshe ring	ˋtsʰe ɦʸu˗ŋ	長寿
ri dwags	ˊɦɚ dɑʔ	狩人
rogs po	ˊɦo˗ˠ pu	友人
ras skud	ˊɦɛ˗ː ʰkɯʔ	糸
ras	ˊɦɛ˗ː	布
ske rags	ˉʰkɔ̃ ɦʸɚʔ	ベルト
red	ˊɦe˗ː	よろしい
ring	ˊɦe˗ŋ ⁿdʑoː mɐ	長い
rogs byed	ˊɦo˗ˠː ˊbe	助ける
ring	ˊɦʸu˗ŋ	伸びる

2. そり舌化母音を含まないもの

蔵文	mThachu 方言	語義
ra	ˆɦʸɐː	山羊
rwa	ˊwaː	角（つの）
a rag	ˊʔɐ ɦʸɑʔ	酒

[18]ただし Zhollam 方言では、以上の分類基準に関わる蔵文対応形式の大多数に咽頭化母音が対応する。

[19]そり舌化母音への発展過程に関する議論は鈴木 (2009) を参照。

そり舌化母音を含まない以上の３語は、それぞれ母音/ɐ, a, ɑ/について、mThachu 方言では対応するそり舌化母音が存在しないものであるから、そり舌化母音に発展しなかったのはその共時的な出現の制限を受けているといえる。

参考資料

この対応関係に関して、張濟川 (2009:311-312) にはおそらく 1950 年代に中国で行われた一斉調査のときに記録されたと考えられる mThachu 方言（原文では「拉普」と表記）の形式が挙げられていて、それによると次のような形式がある[20]。

蔵文	mThachu 方言	語義
ra	fiar	山羊
ras	fier	布
rwa	war	角（つの）

それぞれの音表記の末尾子音 r が本稿でのそり舌化を表すものと対応関係にあるといえるが、実際のところは「布」の例を除いて筆者の記述にそり舌化母音は含まれていないことに注目できる。この差異の由来は不明であるが、年代差、地域差、個人差などの要因が推測できる。

仮に、1950 年代の mThachu 方言が張濟川 (2009:311-312) の記録のとおり母音に二次的調音が反映されていたと考えるなら、筆者の記録による mThachu 方言の「山羊」はそり舌化母音の特徴をもたないため、歴史的に*ra > fiar > fiʴɐ という音変化が生じた可能性がある。このような音変化の妥当性は検証を要する。

4.2 蔵文足字 r 対応形式

以下では、蔵文両唇音字＋足字 r、蔵文軟口蓋音字＋足字 r、これら以外の基字＋足字 r に分けて整理する。

4.2.1 蔵文両唇音字＋足字 r の形式に対応するそり舌化母音

この場合は基本的に初頭子音が両唇音/pʰ, p, b, m/を含むものになる。

[20]張濟川 (2009) に引用される方言形式は、一部を除いて声調の記載が省略されている。次に引用する形式にも声調の記載がない。

1. そり舌化母音を含むもの

蔵文	mThachu 方言	語義
sprin	ˉpɔ˞	雲
'brug glog	ˊᵐbɔ˞ʔ loʔ	雷
char sprin	ˊtʂʰɛ: bɔ˞	雹
chab brom	ˊtʂʰɛ˞ bɔ˞ŋ	氷
'bru zhing	ˊme˞: zɔŋ	水田
'phrog	ˋᵐpʰɚʔ	強盗
'brug	ˊᵐbɔ˞ʔ	龍
sprel	ˋʰpɯ˞:	猿
sbrang nag	ˆbe˞ nɑʔ	ハエ
sbrang mo	ˆbe˞ mu	ミツバチ
rgyal 'bru	ˆʱdʑɛ ᵐbɯ˞:	栗
rdo ba sbrang	ˊʱdo wɐ ˋbɔ˞ŋ	氷砂糖
bre	ˊpɯ˞	（一）升
'phred 'phred	ˊᵐpʰe˞ ˊᵐpʰe˞:	横
'breg	ˊje ʔɯ˞ʔ	収穫する
'bro	ˊpɯ˞ fiɐ tɕʰeʔ	逃げる
bri	ˊpɔ˞	書く

「収穫する」の例では、mThachu 方言の形式の初頭子音に両唇音が伴っていないが、母音＋末子音の形式は当該蔵文とよく対応する。

2. そり舌化母音を含まないもの

蔵文	mThachu 方言	語義
dpral	ˋʰpa:	額
phrag	ˉpʰa: jɐ	肩
sbrul	ˋʱbɯ:	蛇
dbral	ˉʰpaʔ	裁断する

そり舌化母音を含まないものとしては、「蛇」を除き母音が/a/で実現されており、対応するそり舌化母音が見られないことと関連があるといえる。

4.2.2 蔵文軟口蓋音字＋足字 r の形式に対応するそり舌化母音

この場合は基本的に初頭子音が軟口蓋音/kʰ, k, g/を含むものになる。

1. そり舌化母音を含むもの

蔵文	mThachu 方言	語義
gru ?	ˊkuɾ ⁿdʑɚ˨ŋ	ひじ
grog ma	ˊkuɾ mɐ	アリ
sgro bu	⁻ᶦᵝguɾ wu	ボタン
gri	ˊkɚ	ナイフ
gri gcag	ˆkɚ ʈʂɐ	包丁
khrid	ˉkʰɚʔ	導く
gru	ˊkuɾ	漕ぐ
dkrog	ˊɦɔɾʔ	びっくりする
'khrid	⁻ᶦᵝkʰɚʔ	牽引する
gros byed	ˊʈɔɾ ʈɔɾ ˊbɐ	相談する
'khrungs	⁻ᶦᵝkʰɯɾ	出産する

「びっくりする」「相談する」の例では、mThachu 方言の形式の初頭子音に軟口蓋音が伴っていないが、母音＋末子音の形式は当該蔵文と対応する。

2. そり舌化母音を含まないもの

蔵文	mThachu 方言	語義
skra	ˋʰka	髪
khrag	ˉkʰaʔ	血
khra	ˉkʰaː	鷹
khri chag gcig	ˉʈʰə ʈʂʰɐ ˋʰʈʂə	1 万

そり舌化母音を含まないものとしては、「1 万」を除き母音が/a/で実現されており、対応するそり舌化母音が見られないことと関連があるといえる。

なお、「相談する」「1 万」の例は、初頭子音がそり舌閉鎖音を形成している点で、借用した音形式であると考えられる。蔵文基字＋足字 r とそり舌閉鎖音という音対応としては、後述の蔵文 dr を初頭子音とする形式の対応関係に認められるものであり、また多くのチベット語方言に認められる対応関係である。

4.2.3 上述以外の蔵文足字 r の形式に対応するそり舌化母音

具体的には、蔵文 dr, sr を含む対応関係が該当する。

1. そり舌化母音を含むもの

蔵文	mThachu 方言	語義
drus ma	ˆʈɔ˞ mɐ	白米
ˈdre	ˀˡɖɔ˞:	鬼
drud	ˊʈo˞:	引きずる
dri	ˉkeʔ ˊʈɔ˞	尋ねる

2. そり舌化母音を含まないもの

蔵文	mThachu 方言	語義
drel	ˊʈɯ:	ロバ
sran ma	ˉʰse: mɐ	豆
drug	ˉʈɔʔ	6
bcu drug	ˉʰʈʂuʔ ɖɔʔ	16
drug cu	ˊʈɔ: ʰʈʂu	60
srab	ˉʰsɯ: ʂɐ mɐ	薄い
srung	ˆʰsɔŋ	守る
dran	ˊʈẽ ʰka	思う

蔵文の初頭子音群 dr は基本的にそり舌閉鎖音に対応するという点で、蔵文両唇音字/軟口蓋音字＋足字 r の組み合わせとは異なる音対応を見せることになる。そして、蔵文 dr の対応音がそり舌閉鎖音であってそり舌破擦音でないことに注意が必要である。mThachu 方言ではそり舌閉鎖音とそり舌破擦音が対立し、上記「16」が示すように、両者の来源は異なる。後者は蔵文 c, ch, j を含むものに対応する[21]。

4.3 蔵文基字/足字 r をもたないものまたは蔵文非対応形式

ここでは、mThachu 方言でそり舌化母音をもつにもかかわらず、対応する蔵文形式に基字/足字 r をもたない例や、対応する蔵文がない例を示す。

蔵文	mThachu 方言	語義
pus mo	ˆpe˞: mũ	ひざ
ljid po	ˊˡʲɖʐo˞ ɦɐ	重い
shi po ba	ˊʂʰɔ˞ pu wɐ	死んだ
chab brom	ˊʈʂʰɛ˞ bɔ˞ŋ	氷
—	ˊʈʂɔ˞	拭く
—	ˋʰtsɔ˞ ɦˇɐ	負う

[21] これは Sems-kyi-nyila 下位方言群に属する多くの方言が示す対応関係である。鈴木 (2008) 参照。

— ˋɦʷaː ɦuˊ　　酔う
— ˊkɛː ɦʷuˊ　　青稞

「ひざ」の例は、そり舌化母音以外の分節音の特徴は蔵文と酷似していると見える。そり舌化の来源は不明である。

「重い」「死んだ」の例もまた、そり舌化母音以外の分節音の特徴は蔵文と近いと考えられる。ただし、初頭子音がそり舌音であることがそり舌化の特徴と何らかの関連性をもっているかもしれない。そうすると「氷」「拭く」の例のそり舌化母音も、初頭子音がそり舌音であることと何らかの関係があるかもしれない。しかしながら、上に述べた蔵文 dr 対応形式で初頭子音にそり舌音を含んでいるにもかかわらず母音がそり舌化していない点から見ると、よい解釈であるとはいえない。

「負う」の例は、初頭子音が歯茎破擦音であることを考えると、蔵文では「歯茎破擦音＋足字 r」という組み合わせは存在しないので、mThachu 方言において独自に発展した形式であると考えられる。

「酔う」の例は、徳欽県燕門郷で話される Sakar（燕門/斯嘎）方言（得榮徳欽方言群雲嶺山脈西部下位方言群に属する）の/ˊra rwo/「酔う」と関連があると見える。Sakar 方言の形式を一種の地域語と仮定すれば、この口語形式の初頭子音/r/を蔵文基字 r に対応する要素と見立てることができ、蔵文基字 r の事例と酷似する対応関係にあることが分かる。

「青稞」の例は、上の「酔う」の例を参考にすると、迪慶州およびその周辺域に分布するチベット語諸方言に見られる/ˊkə rə/といった形式[22]に関連性を求めることができる可能性が高い。

5　まとめ

本稿では、これまでに十分知られていなかった Melung 下位方言群に属する mThachu 方言のそり舌化母音について詳しく音声記述を行い、その特徴を明らかにした。それに加えて、そり舌化母音をもつ語と蔵文の対応関係を提示し、先行研究で知られている Melung 下位方言群の諸方言と同様、蔵文基字および足字の r との対応関係を示していることが分かった。その一方で、少数ではあるが、当該の蔵文 r とは関わりの見られない形式も存在することが分かった。

Melung 下位方言群の諸方言では、mThachu 方言のそり舌化母音に対応する形式について、そり舌化ではないさまざまな音特徴が見られるけれども、蔵文との比較を通じてそれらが共通の来源すなわち母音に先行する r をもっていることが示された。

[22] この形式についての詳細は、Suzuki (2009b:84) を参照。

付録：mThachu 方言の子音と声調

子音（子音連続の構成要素としてのみ現れるものも含めた一覧）

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	$ʈ^h$		k^h	
	無声無気	p	t	ʈ		k	ʔ
	有声	b	d	ɖ		g	
破擦音	無声有気		ts^h	$ʈʂ^h$	$tɕ^h$		
	無声無気		ts	ʈʂ	tɕ		
	有声		dz	ɖʐ	dʑ		
摩擦音	無声有気		s^h	$ʂ^h$	$ɕ^h$	x^h	
	無声無気		s	ʂ	ɕ	x	h
	有声		z	ʐ	ʑ	ɣ	ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ȵ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音	有声	w			j		

以上に加えて、/ɦʷ/と/ɦʲ/が認められる。

声調

4 種の調類が認められ、それぞれ語単位にかかる。

¯：高平　　´：上昇　　`：下降　　ˆ：上昇下降

参考文献

黒澤直道 (2001)「ナシ（納西）語「緊喉母音論争」の意義—中甸県三壩郷白地方言に見られる音声現象からの考察—」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 61 号 241-250

—— (2009)「ナシ（納西）語大研鎮方言の音韻体系—先行研究との比較を中心に」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 77 号 63-81

鈴木博之 (2008)〈迪慶藏語是康巴藏語中的“一個”次方言嗎〉《康定民族師範高等専科學校學報》第 3 期 6-10

—— (2009)《追尋消失的 r 介音—雲南藏語土話中的語音演變是否有納西語的影響—》2009 南開・語言接觸国際學術研討會發表論文

鈴木博之、ツェリ・ツォモ (2007)「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』第 26 号 93-101

Ladefoged, Peter (2006) *A Course in Phonetics*, 5th edition, Wadsworth

Suzuki, Hiroyuki (2009a) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan -, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34, National Museum of Ethnology

—— (2009b) Origin of non-Tibetan words in Tibetan dialects of the Ethnic Corridor in West Sichuan, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Issues in Tibeto-Burman Historical Linguistics*, 71-96, National Museum of Ethnology

—— (2009c) *Historical development of *r initial in Gagatang Tibetan (Weixi, Yunnan)*, paper presented at 42nd International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics (Chiangmai)

Suzuki, Hiroyuki & Tshering mTshomo (2009) Preliminary analysis of the phonological history of Melung Tibetan, in : *Language and Linguistics* 10.3, 521-537

Zhang, Jichuan (1996) A sketch of Tibetan dialectology in China: Classifications of Tibetan dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115-133

瞿霽堂 (1991)《藏語韻母研究》青海民族出版社

《維西傈僳族自治県概況》編寫組 (2008)《維西傈僳族自治県概況》民族出版社

吳光范 (2009)《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》雲南人民出版社

張濟川 (2009)《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》社會科學文獻出版社

Voyelle rétroflexe dans le dialecte khams-tibétain de mThachu [Weixi/Tacheng]

—description et analyse phonétique—

Hiroyuki SUZUKI

résumé

Le dialecte khams-tibétain de mThachu, parlé au village de Tacheng, district de Weixi, préfecture de Diqing en Chine, possède systématiquement une voyelle rétroflexe. Cet article présente des exemples de la voyelle rétroflexe avec une description phonétique détaillée, et en contraste avec le tibétain écrit.

La rétroflexion du dialecte de mThachu se réalise comme une articulation secondaire vocalique selon laquelle la pointe de la langue se cambre contre la position postalvéolaire ou prépalatale (V˞). Il y a aussi dans plusieurs exemples une articulation secondaire double : une voyelle rétroflexe-vélarisée (V˞ˠ).

L'origine de la voyelle rétroflexe est le son correspondant à la lettre tibétaine *r* en tant que consonne centrale et liquide dans la majorité d'exemples.

（受領日　2010年4月20日）
（受理日　2010年10月15日）